

標準データ記述言語を用いた未解読楽譜の認識と記述

——長唄正本の胡麻点を例にとって——

矢向 正人

本稿は、長唄正本に記されている胡麻点を例にとり、読み方や演奏方法が解明されていない楽譜、すなわち未解読楽譜を計算機により認識し記述する考え方と方法とを提案するものである。未解読楽譜の解読のプロセスは、できるだけ多くの解釈を提示したうえで、可能性の低い解釈を切り捨てていくという手順が踏まれるべきである。もし選択肢が一つになれば、そこで妥当な解釈が選択されたことになる。しかし、未解読であれば、正しい解釈を一つに特定することができない。よって、未解読楽譜の解読にまず必要であるのは、未解読箇所、同一の記述形式で可能な限り多くの解釈をそれぞれが対等の関係になるように記述するための工夫である。この目的のために有力であるのが、楽譜データの入出力にXML (eXtensible Markup Language)を用いる方法である。すでに筆者は2000年に、長唄の現行譜のためのデータ形式をXMLを用いて策定している。本稿では、楽譜データに未解読記号を認識し、そこに複数の解釈を記述するため、XMLデータの変換処理に用いられるXSLT (eXtensible Stylesheet Language Transformations)をXMLと併用した。長唄正本の胡麻点は、享保16年(1731)初演の《傾城無間の鐘》の正本に見いだされ、以後の正本でその数は増えるが、安永期に入ると減少し、天明期以後の正本からは消える。胡麻点は、能の謡本の胡麻符や平家の墨譜と類似するため、音程や音価などの楽譜情報を持っていた可能性がある。しかし、どの例も複数の解釈が可能であり、解読結果は一意に特定されない。本稿では、まず、長唄《白妙》の正本を題材に、胡麻点を<記号 未解読>として長唄正本を記述するXMLデータ形式を策定した。次に、胡麻点に、解釈1、解釈2、解釈Xと未解読記号の処理系を作り、未解読箇所に解釈を記したデータをそのつど変換出力する方法を、XSLTを用いて考案した。この方法で未解読楽譜をデータベース化すれば、未解読記号の情報をインターネットを介して研究者間で共有することができる。